
愛していると言えば、嘘になる

蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛していると言えば、嘘になる

【Nコード】

N4982Y

【作者名】

蘭

【あらすじ】

気が付いたら、知らない場所にいました。私は誰？ここはどこ？何も分からないなりに、ツンデレ少年、妙齢の騎士様、フェロモン系の騎士様など、巡り合いに恵まれて自分の居場所を見つけていく少女のお話です。ゆっくり更新になります。

誓いの言葉

そして娘と王子様は結婚し、ずっと幸せにぐらししました。
めでたし、めでたし。

彼女はベッドの上でお気に入り絵本をめくっていた。子供のころは母親にせがんで毎晩のように読んでもらっていたものだ。最後のページが特に好きで、それまでに出会った色々な人や動物に見守られて寄り添う王子と美しい娘の絵を飽かずに眺めていたものだ。

明日、自分も同じように友人や家族に見守られて結婚する。思っていたよりちょっと早かったけれど、素敵な教会も白いドレスも薔薇のブーケも絵本と同じだ。子供の頃の絵本になぞらえて結婚式をするなんて乙女チックだな、と自分のことなのに笑いがこぼれる。

明日の朝は早い。絵本を閉じて、明かりを落とし今日でお別れになるベッドにもぐりこんだ。

明日はきつといい日になる、と言い聞かせながら。

結婚式の準備は抜かりなく進められたし、式の予行練習もした。当日になって夫が指名していた牧師が急病とのことで代役が入ったが、それ以外は皆予定通りだ。

それでもやはり緊張しながら、彼女は教会の扉が開くのを待っていた。いよいよ入場の音楽が流れ、父の腕にかけた手に少しだけ力がこもる。歩き出す前に娘の方を振り返った父が「大丈夫、綺麗だよ」と見当違いな励ましをくれた。

バージンロードをゆっくりと歩きながら、彼女は昨日見た絵本の最後を思い出す。

ほら、友人達が来てくれている。この間まで高校の教室で笑いあ

っていたのに、今日は皆めかし込んで大人びて綺麗だ。神妙な顔そして彼女の方を見つめている。海を越えて遠くから駆けつけてくれた親戚もいる。昔から良くしてくれていた伯母さんが涙ぐんでいる姿が見えた。大丈夫、幸せになれる。あの絵本と違うのは、娘が王子様を愛してはいないということだけ。それだって知り合う時間が足りなかっただけで、きっとこれから仲良くしていける。お父さんもお母さんも、彼はいい人だって言っていたもの。これからは両家で力を合わせていけば、お父さんの会社もきっと立ち直る。皆きっと良い方に行く。

そう自分に言い聞かせながら、ついに知り合って間もない夫のもとへとたどり着いた。

出会ってからいつもそうだったように目じりに皺を寄せて微笑む夫は、彼女の手をとり牧師に向き直った。彼女もそれに倣い、祭壇を仰いだ。

今朝慌ただしく挨拶をした牧師はこの国の人なのか、とても綺麗な浅葱色の瞳をしていた。その瞳を和ませて、二人に語りかける。彼女は高まる緊張に、有難いお話を殆ど覚えていられなかった。背後ではどっと笑いが漏れていたので、きっと面白いことなど言っただろう。

名前を呼ばれてはっとする。

「汝、仙崎杏奈はこの者を夫とし、生涯愛し抜くことを誓いますか。」

彼女は深く息を吸って、青い瞳に向かって答えた。

「はい、誓います。」

そこで、突然世界が暗転する。彼女には恐れる暇も何もなかった。

目覚め

彼女は多くの人がざわめく気配で目を覚ました。頭の後ろが酷く重く感じる。体を横に向けて目を開けると灰色の石が敷き詰められた床が目に入った。ざわめきからは意味を成した言葉は聞き取れない。酷く埃っぽい臭いが鼻について思わず顔をしかめながら、ゆっくりと上半身を起こした。

（ここは、どこだろうか。）

首を軽く振って辺りを見回すが、全く見覚えのない場所だった。天井の高い石造りの建物の広い空間に大量に長い椅子が置かれており、人があちこちで動き回っているのが見えた。

（教会？）

奥の方に大きな石像のようなものが掲げてあるのをみて、ぼんやりとそう思う。しばらく床に座り込んでいたが、新しく思い出されることも何もなかった。とにかく自分が今どこにいるのかを確認しようとして辺りを見回した。自分がいた隣に何人も人が寝転んでいる。明らかに顔色の悪い者もいて、病人を集めているのではないかと思えた。奥に向かって視線を動かすと大きな椅子を使っているいくつかのエリアに空間が仕切られており、かなりの人数の人がいることが分かった。その更に奥に小さな祭壇が見えた。人は沢山いるのに見たことがある顔はなかった。誰も自分に気がついた様子もない。

いったいどうすればいいのだろうと、辺りをもう一度慎重に眺めていると祭壇近くで男の大きな声が上がった。すぐに周りにいた者まで何か大きな声で言いあい始めた。聞き取ることはできないが、

怒鳴り合いであることは分かる。高い天井に音が反響してまるで周りで男たちが怒鳴っているように聞こえる。見守るものはみな巻き込まれたくないというように俯き、縮こまる。彼女もただ座りこんだまま、何もできずにそちらを見ていると、黒い髪の少年が男達の喧嘩を止めに入るのが見えた。怒鳴り声に紛れて彼の言葉は聞こえないが、身振り手振りは明らかに大人達を諫めようとしている。

だが、激昂している中年の男たちに比べて少年はいかにも細く、顔つきもまだ幼い。男達は素直に引きさがったりはしなかった。むしろ少年を小突いて馬鹿にしたかのように嘲笑った。

「なんだ、腰ぬけ村長の倅が偉そうに。だったらお前が何とかしろよ。親子揃って口ばかりか。」

男たちがせせら笑うと、少年は眦を切って男を睨みつけた。

「なんだと？ 親父は逃げたんじゃない、先頭切って逃げたのはお前の方だろ。」

そこから再び喧騒が大きくなった。少年は男に殴りかかり、男が殴り返し、とうとう殴り合いの大喧嘩だ。

どうやら、ずいぶん大変なところに居るようだ。

いいはふい？

喧騒は止まず、誰もが息をつめて喧嘩の行方を見守っていると、不意に大人の怒鳴り声に子供の泣き声加わった。幼い子供のぐずる声があつと言う間に大きくなり、火のついたように一人が泣きだすと、伝染するように子供の泣き声が増えてくる。彼女が泣いている子供の姿を見つけるよりも早く、前方で喧嘩していた集団の一人から大きな声がかかった。

「うるせえ。誰か、黙らせろよ。」

中年の男達はそう言って、しかし、氣勢が削がれたのか悪態をつきながらも殴り合いは止まったようだ。先ほどの少年は、まだくすぶっている大人たちの輪を抜けて、乱れた頭髪を直しながら走ってくる。彼女は彼の目指す方をみて、泣いている子供達を発見した。小さな子供たちが肩を寄せあいながら、顔を真っ赤にして泣いている様子に思わず立ち上がって歩み寄って行く。椅子と人を避けながら駆けてくる少年よりも彼女の方が早く子供たちの元にたどり着いた。

「怖かったね？」

中でも特に小さな男の子の肩を抱いて声をかけてやると、戸惑うように少し泣き声が小さくなった。

「泣かないで。大丈夫よ。」

何が大丈夫なのか、自分自身さっぱりわからないままそう声をかけてやると、わずかの間で幼児の泣き声はますます小さくなり、ぐずぐずと鼻を鳴らしながら彼女の肩口に顔を埋めてきた。もう片方の手で近くにいたもう一人、4、5歳くらいの長いお下げの少女の小さな頭を撫でてやると、少女も彼女の腰のあたりに抱きついてき

た。「怖かったね、もう大丈夫だからね。」とそればかり繰り返している、子供は次第に落ち着いてきた。周りで半べそだった少し年嵩の子供たちも不安げな眼差しながら涙は引いてきたようだ。

「だあれ？」

彼女に抱きついていた少女が、まだ赤い目のまま問いかけてくる。彼女は微笑んで返事をしようとし、そして言葉が出て来ないことに気がついた。

自分の名前が思い出せない。名前だけでなく、どこから来たのかも、家族のことも何も覚えていなかった。分からないことが多すぎて、思い出せないという感覚ですらない。笑顔を中途半端なまま凍りつかせて黙り込んでしまった彼女を見上げて少女は目をしばたかせている。

「えーと、何だろう。」

視線を宙に彷徨わせても、答えなど思いつくはずもない。棒立ちになったまま困り果てていると、今度は最初に抱き寄せた子供が声をあげた。

「アーア」

まだ喋れないのだろう。頭を撫でてやるとアー、アーと繰り返して笑いかけてくる。

「アーニャ？アーニャっていうの？私、ミーナよ。」

ずっと彼女の返事を待っていた少女が問いかけてきた。子供の舌足らずの呼び声がアーニャと聞こえたらしい。彼女はどうも違うようだと言葉をかしげる。

「アーニャなんて知らない名前だな。うちの村にそんな名前の子供はいない。お前の顔もみたことがない。」

先ほど殴り合いをしていた少年が既に隣にやってきていた。近くで見ると思ったよりも背が高く彼女は少し見上げるような関係にな

る。まだ細い体つきや、幼さの残る顔立ちからするとまだ14、15歳ではないかと思われた。少年は大きな目を細めて不審そうに彼女の事情を見ている。雨が降った後の大地のような深い茶色の瞳を見つめ返して、彼女が言葉に詰まっていると、彼は周りにいた子供たちを見回して同意を求めると10人足らずの子供たちは一様に頷いた。彼は子供たちのリーダー格の存在であるようだ。

「そう。皆も知らないの。」

彼女はため息をついた。だいたい名前を改めて問われた時点で、自分が子供たちの知り合いではないことは分かりきっている。お前は誰だ、と言わんばかりの子供たちに向かってゆっくりと話しかけた。

「私も、分からないの。自分がどこからきて、どうしてここにいいのか。思い出せないのよ。それに、ここはどこなのかしら。」

素直に告白すれば、リーダー格の少年を含めて子供達はきょとんとした顔になった。

私はだあれ？

子供がすっかり泣きやむ頃には、大人たちの揉め事も落ち着いたらしく教会の中はずいぶんと静かになっていた。

車座になって石の床に座り込み、子供たちが代わる代わる説明してくれた話をまとめると、ここは国の外れの小さな村の、そのまた外れにある教会であるらしい。昨夜、村がモンスターの群れに襲われ、村人は命からがら教会へと逃げてきたという。モンスターとは一体何のことなのか彼女には全く分からなかったが、襲われたというからには恐ろしい体験だったのだろう。子供たちに詳しく思い起こさせることも憚られて、質問は控えた。

「騎士様が来てくれなかったら、皆殺しだったかもしれない。」

少年がぼそりと呟いた。皆殺しとは穏やかではない。モンスターとは人の命を奪うものであるらしい。しかし、そこにはそれ以上踏み込むべきではないだろう。もう一つ気になった言葉があった。

「騎士様？」

そう聞き返すと、10歳になるやならずの少年は顔をあげて大きく頷いた。

「そうだよ。王都から騎士様が皆で来てくれたんだ。それで早く逃げろって言われて村の半分も逃げたところでモンスターが出てきた。早く逃げ始めてなかったら、皆寝ているところを襲われて、きつともっと大変なことになってたよ。」

モンスターの襲撃について先触れがあったということらしい。子供たちが言うには、今は広間の中には村人しか見当たらないが外には騎士様達がいるのだという。

「今だって教会を騎士様を守ってくれてるんだ。だから、ここに居れば大丈夫。」

少年は両膝を胸に抱きかかえるように身を丸くしながらそう言った。ウィルと名乗った先ほどのリーダー格の少年がその頭を軽く撫でてやると、少年は顔を膝に埋めて更に丸くなった。体を縮めるようすは恐ろしかった気持ちを表すようで、ウィルが肩を抱いてやっていたなければ、彼女が抱きしめていたと思った。

そのウィルは先ほどの喧嘩の内容などから察するに、村長の息子であるらしいが、彼の親も昨夜以来見あたらなくなってしまっているそうだ。子供たちの中では最年長らしいが、それでもまだ14か15歳だろう少年にとって、それはとても大きな不安だろう。

自分に記憶が無いのは、そういう混乱の中で頭を打ったせいかもしれない。そう思って年のため頭を触ってみるが痛むところはなかった。あるいは、と思い巡らす。とても怖い思いをして忘れてしまっているのか。それだったら、思い出すのも恐ろしい気もする。ただ怖い思いをしただけならば、自分が何かを忘れたとしても、周りの子供達が自分を覚えていない理由がない。子供たちによれば、この教会に避難しているのは一つの村の住人だけで、村の人は皆顔見知りだと言う。つまり、自分はこの村の住民ではなかった、ということになる。村どころではない。王都、騎士と聞いて彼女は王様がいて、国を治め、騎士が国を守るのだということはおぼろげに理解できたが、国の名前も王の名前も何も思い起こすことはできなかった。自分はこの国のものではすらないのかもしれない。では、どのの。と自ら問うてもやはり答えは出なかった。子供たちも彼女がどこからきたのか全く見当もつかないという。

一体、自分はどこの何者なのだろうか。

もしかしてお嬢様？

（普通の記憶喪失の人というのは、どういう気持ちになるものなのかしら。）

彼女は、膝の上で寝てしまったミーナの頭を撫でながら考える。

彼女は不思議と静かな気持ちだった。恐怖も焦りもない。何を恐れたいのかも分からないし、急いで何をしなければいけないのかも分からない。とりあえず、ここにいる人達はみな家を追われ、ここでしばらく暮らすようだ。同じように居させてくれたら、当座は生きていける。

まるで他人事のようにそう思いながら、彼女は子供たちの話に耳を傾けた。何の記憶か分からないが、誰かに聞いてもらうと不安が和らぐという説があったような気がする。彼女の傍、というよりもウィルの傍なのだろうが、に集まっている子供たちの大半が避難中に親とはぐれてしまった子どもだった。ミーナはちょうど親が隣町に出かけている間に襲撃にあったということだ。ミーナの両親は運が良ければ、この災難を逃れてどこかの村で避難しているかもしれない。いずれにせよ彼らに共通しているのは、頼れる大人が教会の中にいないということ。そういう意味では、彼女も子供たちと同じ境遇だ。子供たちも自然とそれを察したのか彼女を受け入れてくれた。彼女の膝で寝入ってしまったミーナが彼女のスカートを掴んで離さなかったことも原因の一つだったかもしれないが。

子供たちの話を聞き終る頃に、大きな教会の扉が開いてガシャリガシャリと音を立ながら甲冑を身に付けた男性が入ってきた。その銀色の甲冑と村人の誰も手にしていないような立派な剣から、騎士様の一人だろうと思える。

「夕食の支度ができたそうだ。順に食堂へ。」

彼がそう声をかけると、村人は次々と扉を出てどこかへ向かっていく。子供たちも立ち上がって彼女の手を引いた。

「教会の食堂で毎日朝晩、食事が食べられる。これも騎士団が居るおかげだ。俺たちだけじゃ食べ物まで持って避難なんてできなかった。」

ウィルが説明してくれる。

「夜の移動は危ないから昼の時間に外から物資も運んでくれるそう
だ。だから食べ物とは当面心配いらぬ。服も、そのうち届くと言っ
てた。」

教会へ避難はしているものの陸の孤島のように孤立してしまっ
ている訳ではないようだ。

建物の外へ出てみると屋根だけがかっている渡り廊下のようなも
のがあり、その続く先にいくつか小さな建物が見えた。振り返って
みると自分たちのいた場所がおそらく教会の最大の建物であり祈り
を捧げる場であつただろうということが分かる。

建物の扉の外や廊下の数か所に先ほどの騎士と揃いの甲冑をきた
男たちが立っている。いったいどれだけの数の騎士がいるのだろう。
先ほど、少年は騎士が守ってくれるから大丈夫と言つたが、襲つて
くるかもしれないモンスターについても、騎士についても何も思ひ
出せない彼女は、本当に大丈夫なのか少し不安に思つた。

食事は質素なものだつた。固いパンと豆の入ったスープを配られ
て子供達と一緒に食べる。小さな子供の面倒を大きな子供が見なが
ら決して多くない食事を平らげた。元は教会の食堂ということでき
る広さは無い。食べ終わるとすぐに立ち去らねばならない。子
供たちは足りないとも、美味しくないとも文句を言わず、きちんと
食べて席を立つた。我儘を言わなくて偉いのね、とまだ喋れない少
年の頭を撫でて褒めると、傍にいた7、8歳くらいの少女が不思議

そんな顔をした。

「ちゃんとご飯を食べさせてもらえるのに、我儘言う子なんていないでしょ。お姉ちゃん、本当はいいところのお嬢さんなの？あ、そうだ。ちよつと手をみせてよ。」

彼女が手を差し出すと少女はさつと掴んでまじまじと眺めた。

「お母さんが、いいところのお嬢さんは水仕事も畑仕事もしないから手が綺麗って言ってたんだ。ほら、やっぱり、とっても手が綺麗よ。」

言われて、改めて自分の手を眺めると白い肌に短く揃った艶やかな爪。こぶや傷はなく柔らかい手肌だった。

「お嬢様かー。」

いまひとつピンとこないが、確かに周りにいる村人に比べてみれば、手の柔らかさや肌の白さは段違いで、自分が畑仕事をして暮らしていたとは考えにくい。

「そうだったのかしら？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4982y/>

愛していると言えば、嘘になる

2011年11月17日03時14分発行